



SETOUCHI  
**2024**

## 2024年 国内建築見学実習

ライフキャリア特別セミナーⅢ  
建築国内フィールドワーク

**参加学生**

[ 4 年 ]

西谷 奈実  
越智 こすず  
沖本 菜月  
明見 ひかる  
大江 美和

[ 2 年 ]

椿 美鈴  
佐野 詩月  
松田 千歩

[ 1 年 ]

相原 青空  
安食 文華  
大元 杏莉  
亀廣 心麻  
近兼 弥桜

**引率教職員**

窪田 勝文  
塚野 路哉

## 日程

8/20 (火)

広島駅集合

> 専用車にて移動

■岡山大学津島キャンパス 交流広場

■岡山大学津島キャンパス Junko Fukutake Terrace

J Terrace Cafeにて昼食(野菜たっぷりランチ BENTO)

■奈義町現代美術館

高速道路サービスエリアにて夕食(各自)

ホテル(ホテルモントレ神戸)チェックイン

ホテルにて振り返り学修

8/21 (水)

ホテルにて朝食、チェックアウト

> 専用車にて移動

■ヨドコウ迎賓館(旧山邑家住宅)

車内にて軽食(サンドイッチ)

■司馬遼太郎記念館

■日本橋の家

ホテル(シーサイドホテル舞子ビラ神戸)チェックイン

ホテル内レストランにて夕食(バイキング)

ホテルにて振り返り学修

8/22 (木)

ホテルにて朝食、チェックアウト

> 専用車にて移動

高速道路サービスエリアにて昼食(各自選択)

■本福寺水御堂

■MIMOCA 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

■G-HOUSE

G-HOUSEにて振り返り学修

高速道路サービスエリアにて夕食(各自)

広島駅着、解散

DAY1

# 岡山大学 交流広場, Junko Fukutake Terrace

SANAA

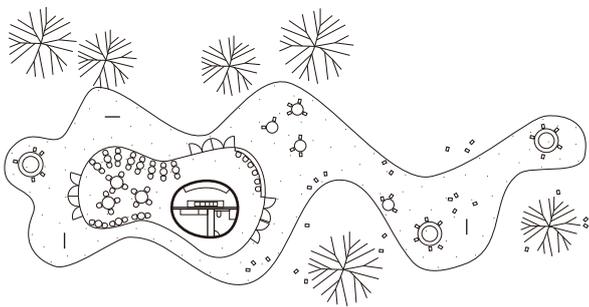
2013, 2014

Location : 岡山

Total area : 198.92 m<sup>2</sup>, 569.03 m<sup>2</sup>

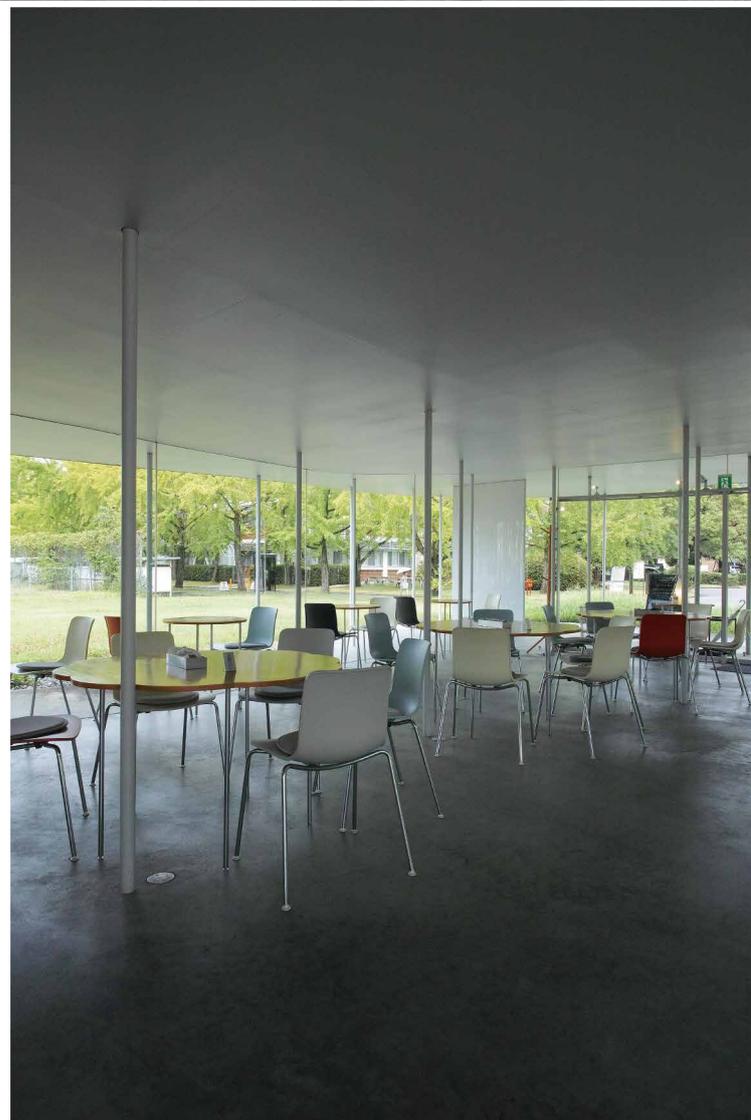
Building area : 149.17 m<sup>2</sup>

Floor area : 149.17 m<sup>2</sup>





Exterior



Interior





DAY1

# 奈義町現代美術館

磯崎新

1994

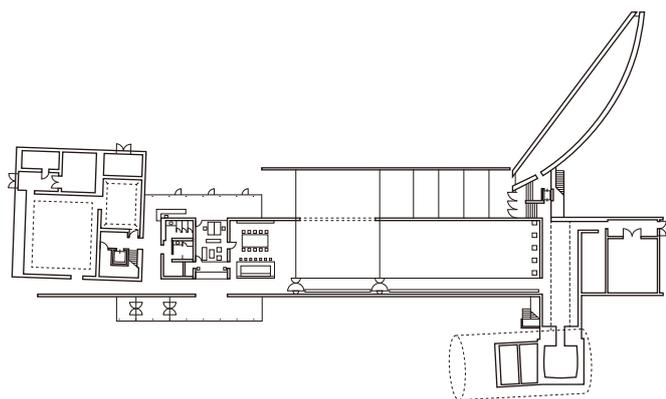
Location : 岡山

Site area : 7,072 m<sup>2</sup>

Total area : 1,887.21 m<sup>2</sup>

Building area : 1,545.03 m<sup>2</sup>

Floor area : 1,572.63 m<sup>2</sup>, 314.58 m<sup>2</sup>

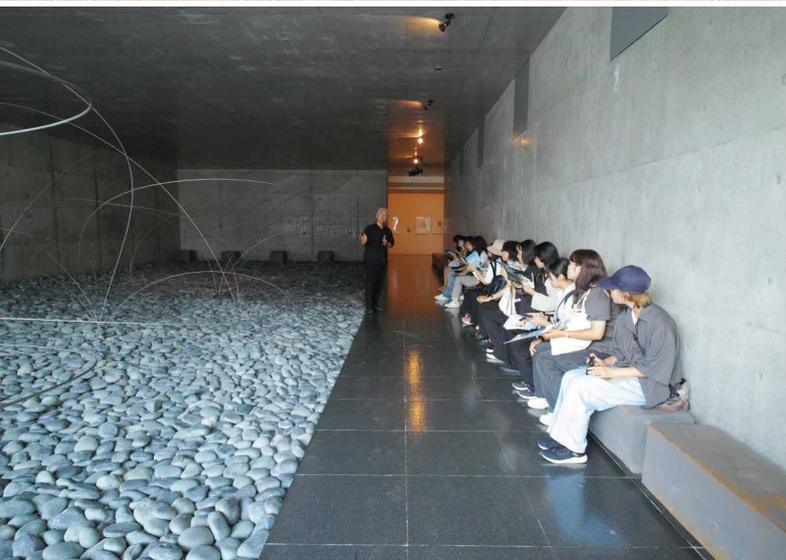


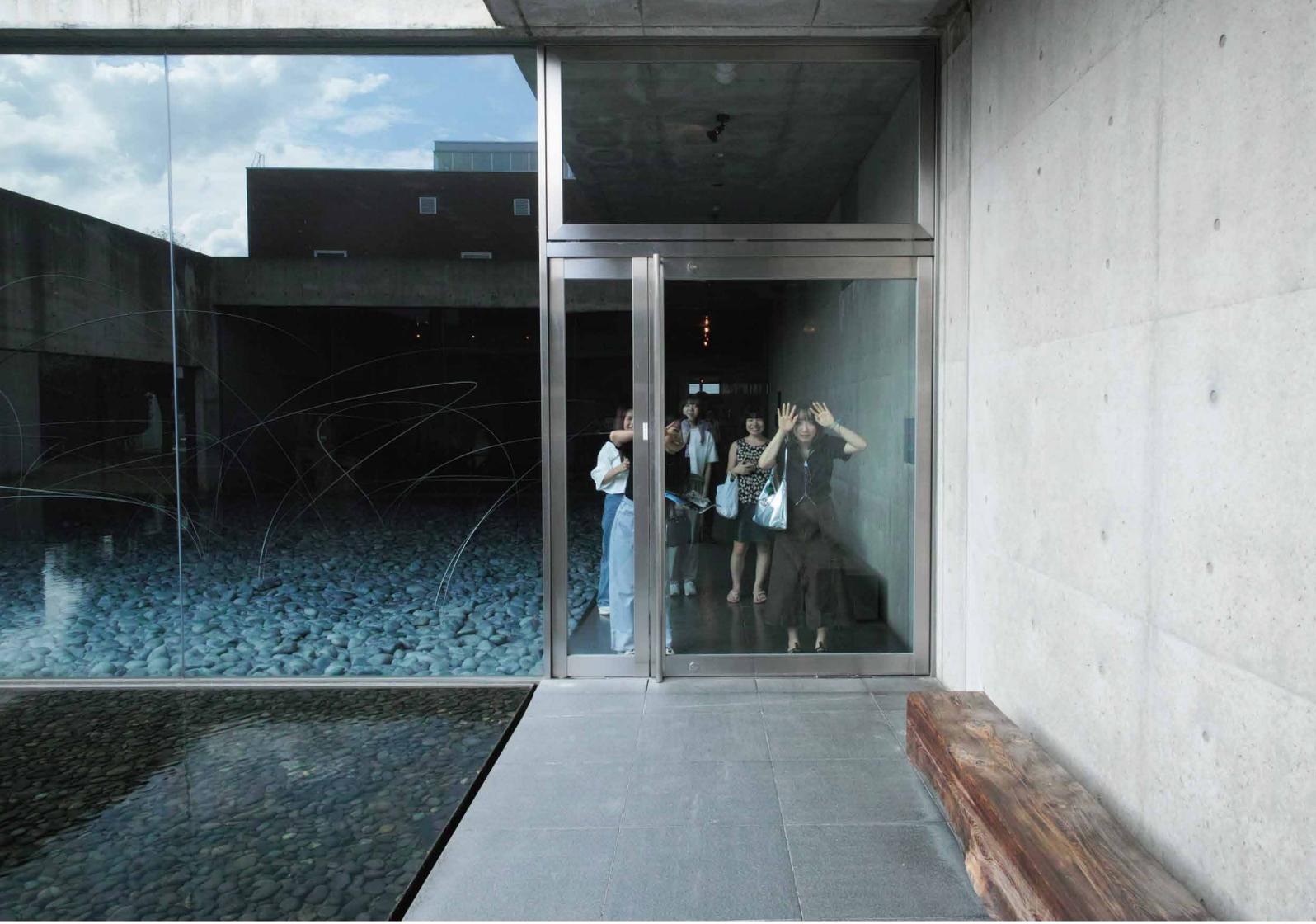


Exterior



Interior





DAY2

# ヨドコウ迎賓館・旧山邑家住宅

Frank Lloyd Wright

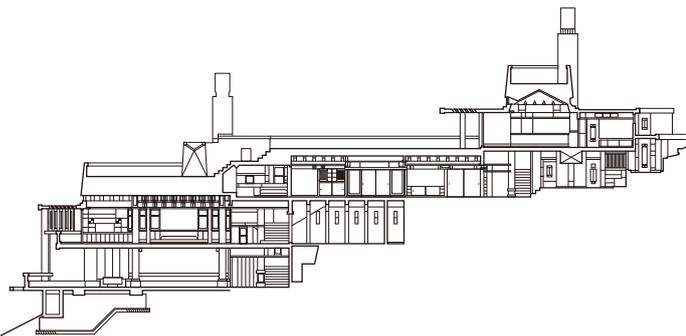
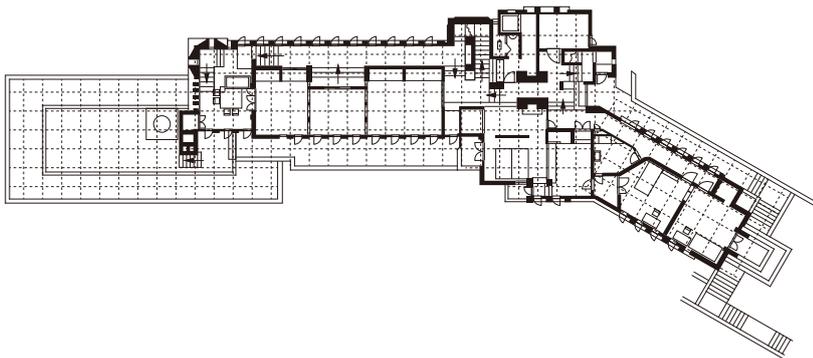
1924

Location : 兵庫

Site area : 5,200 m<sup>2</sup>

Total area : 542.42 m<sup>2</sup>

Building area : 359.1 m<sup>2</sup>





Exterior



Interior





DAY2

# 司馬遼太郎記念館

安藤忠雄

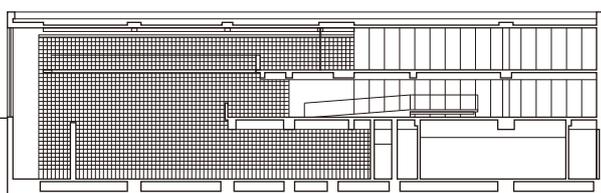
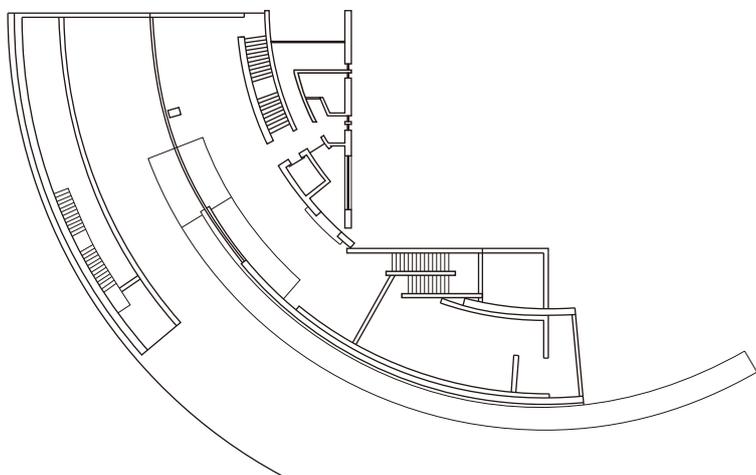
2001

Location : 大阪

Site area : 1,009.96 m<sup>2</sup>

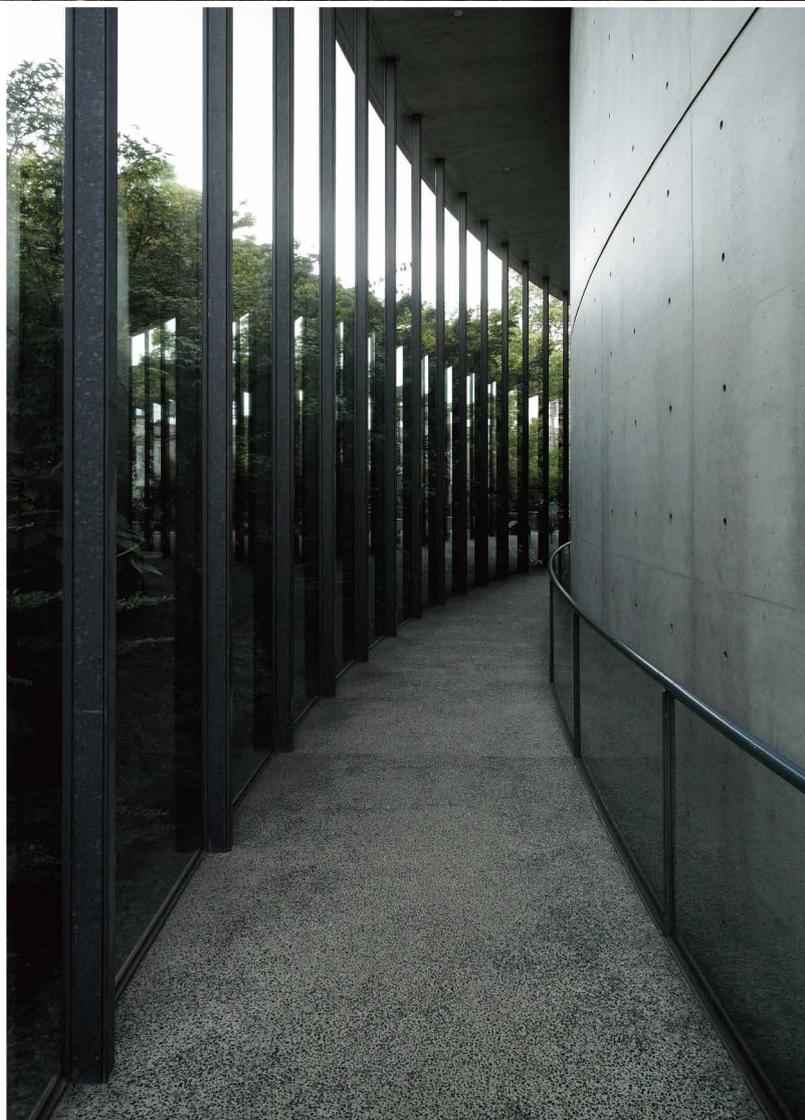
Total area : 997.05 m<sup>2</sup>

Building area : 445.86 m<sup>2</sup>

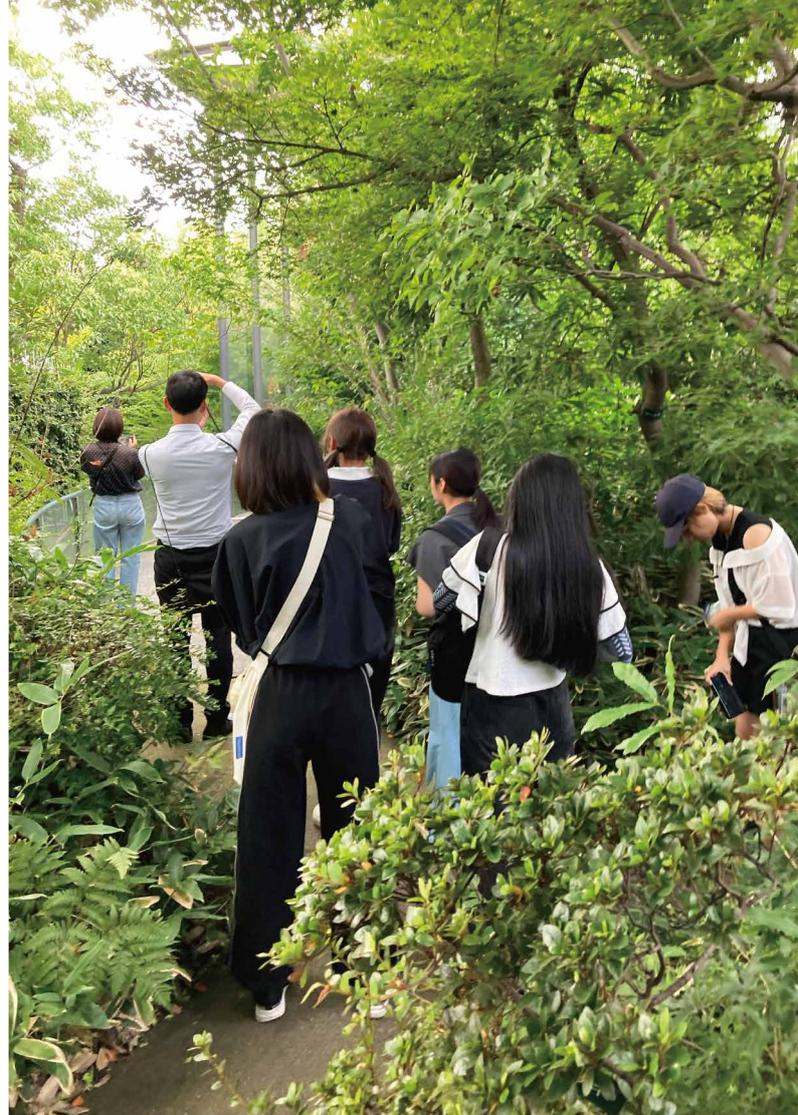




Exterior



Interior





DAY2

# 日本橋の家

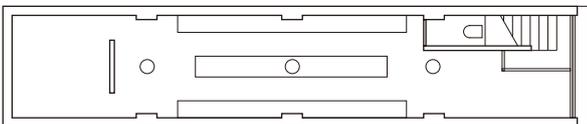
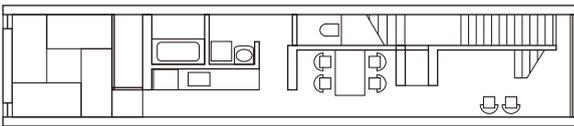
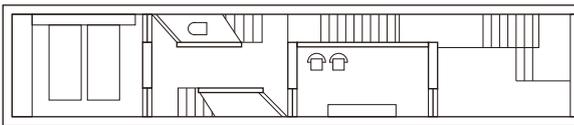
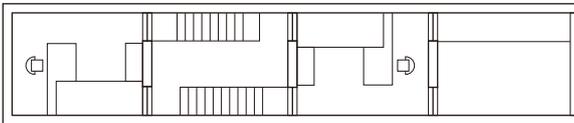
安藤忠雄

1991

Location : 大阪

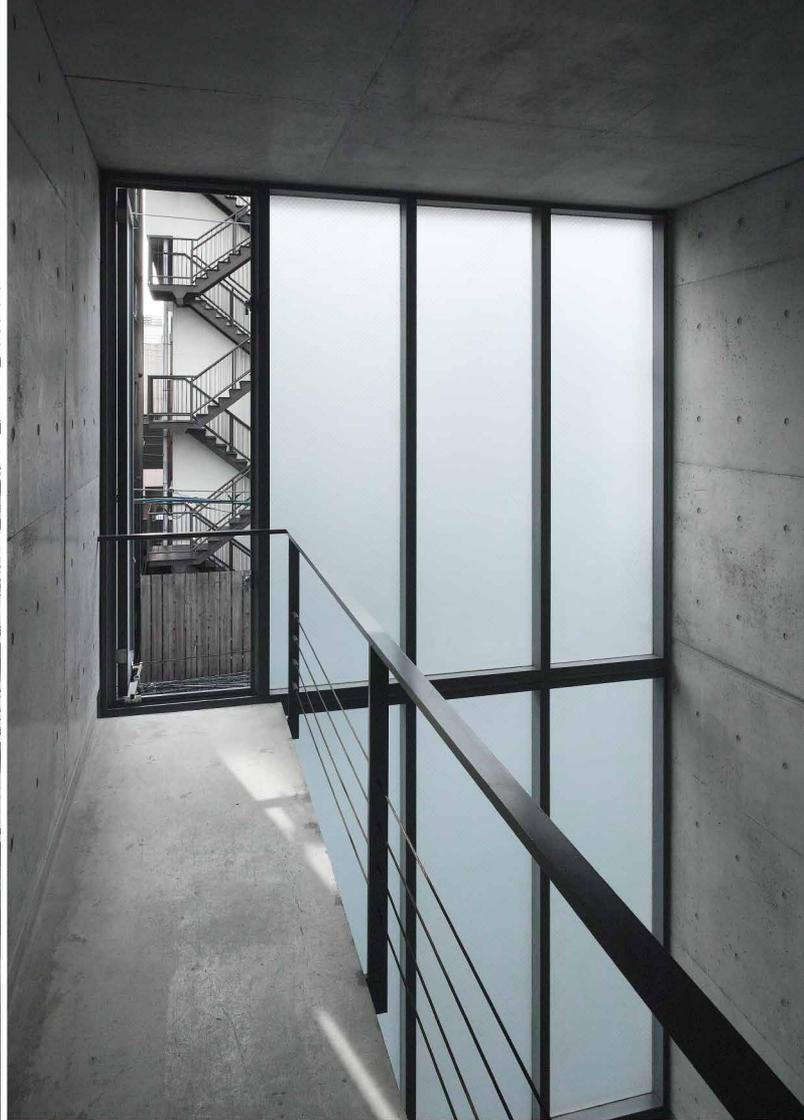
Site area : 57.8 m<sup>2</sup>

Total area : 139.1 m<sup>2</sup>

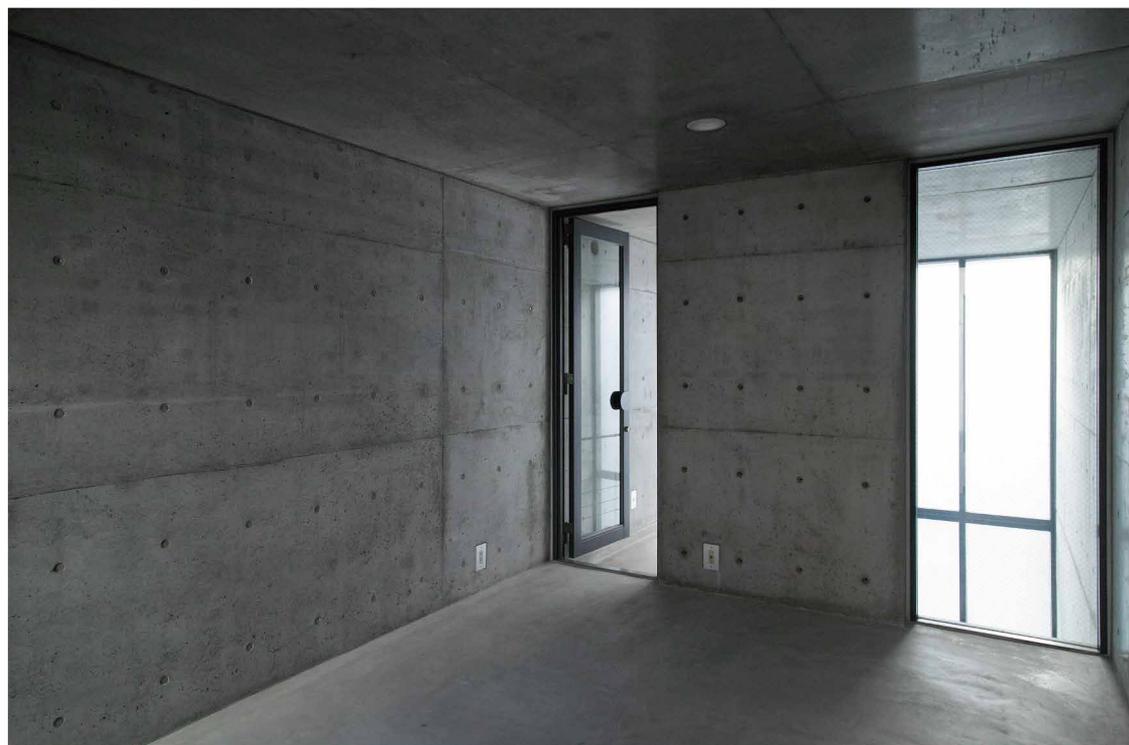




Exterior

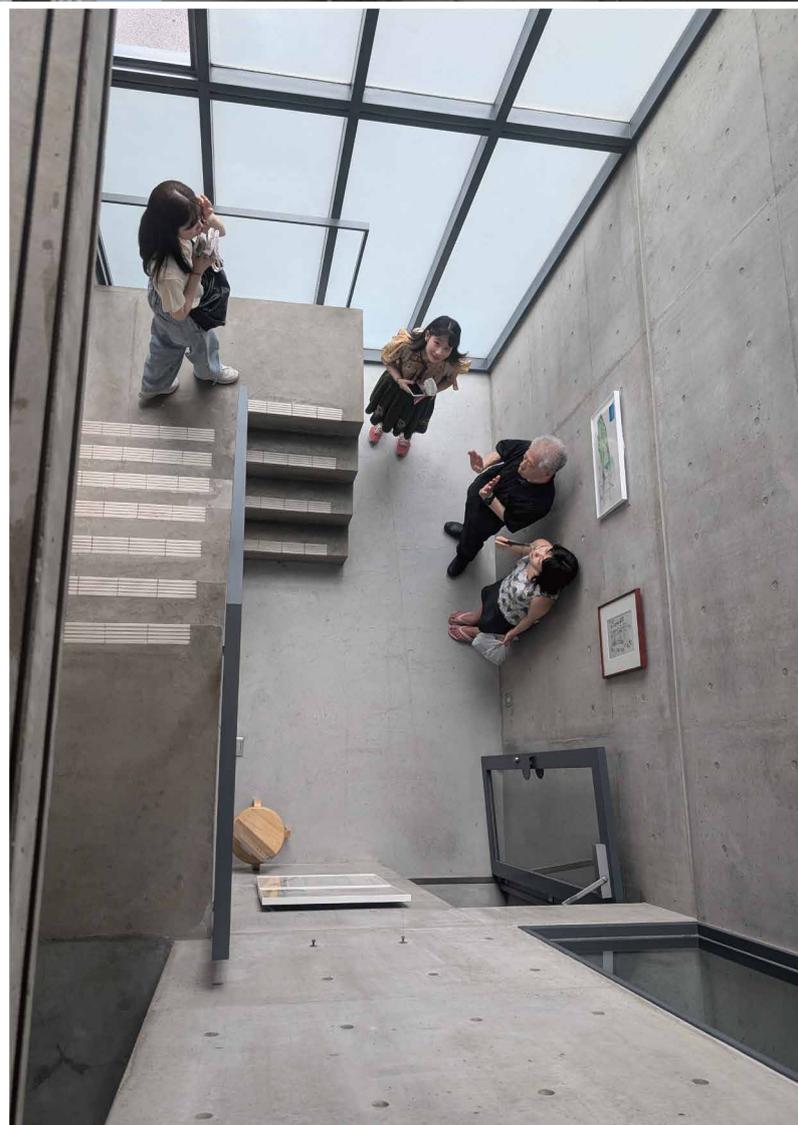


Interior



Interior





DAY3

# 本福寺水御堂

安藤忠雄

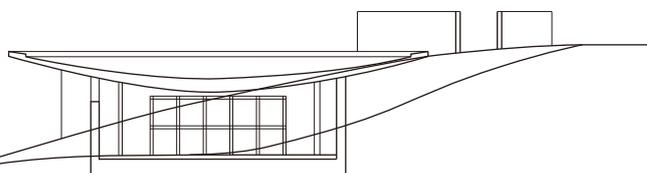
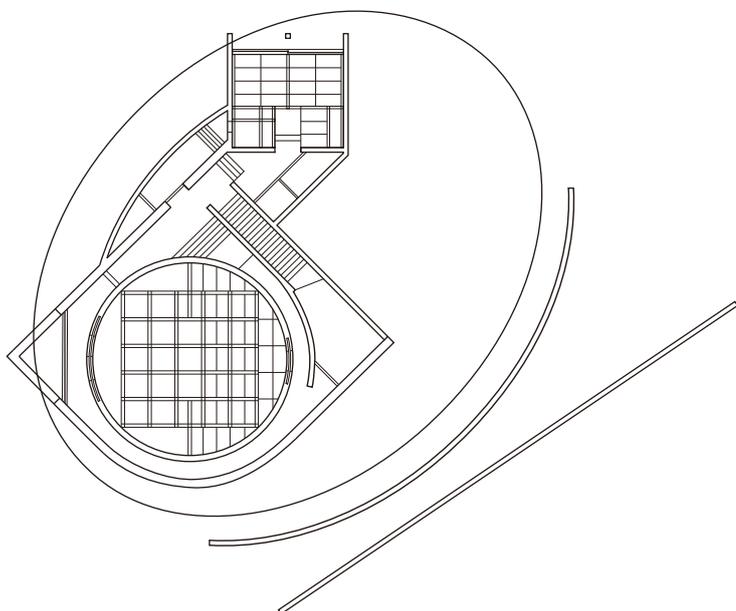
1992

Location : 兵庫

Site area : 2,990.75 m<sup>2</sup>

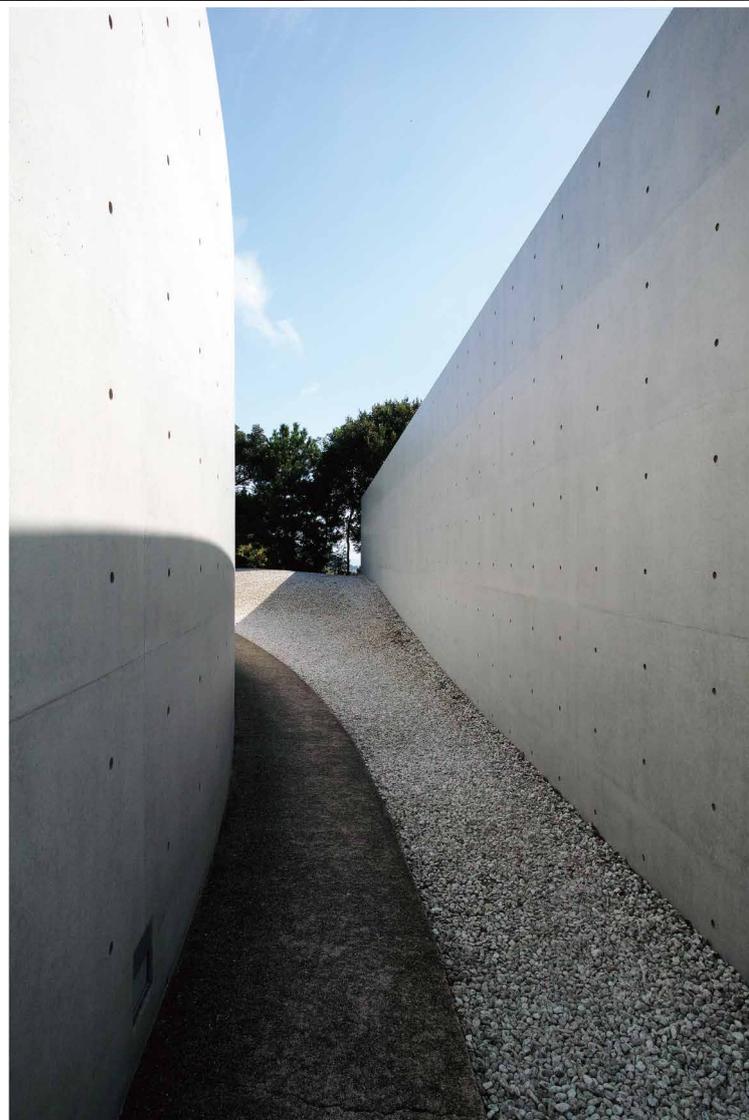
Total area : 417.16 m<sup>2</sup>

Building area : 859.47 m<sup>2</sup>



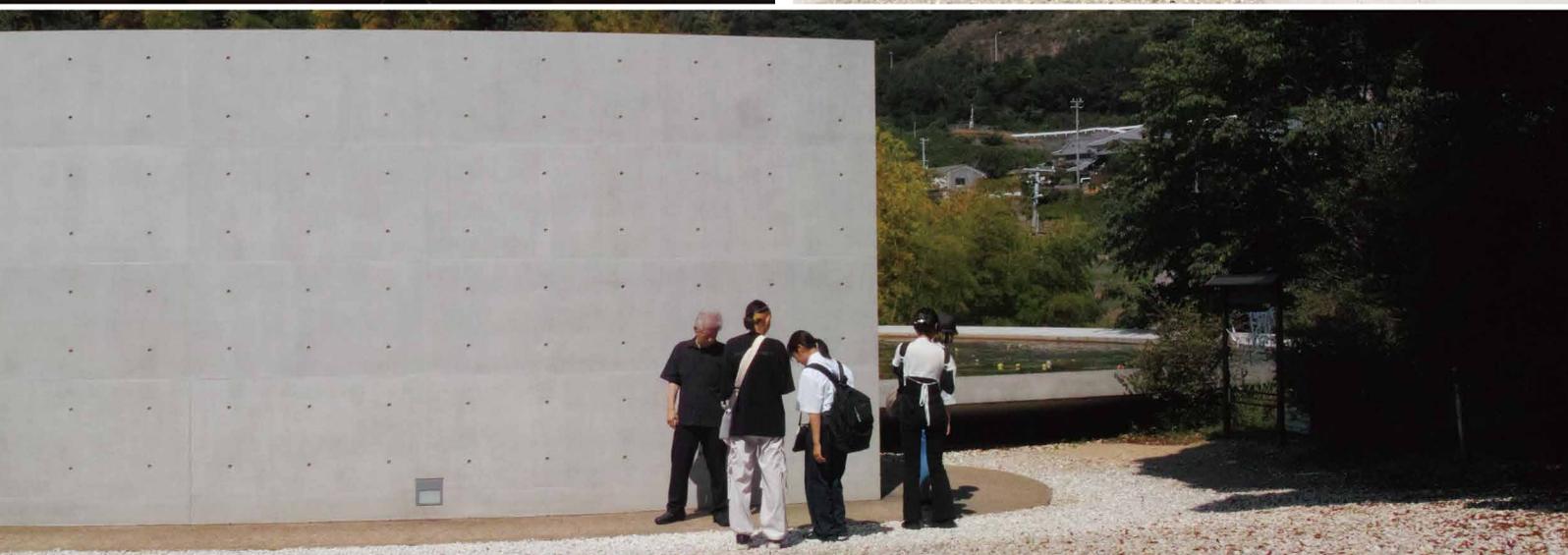


Exterior



Exterior





DAY3

# MIMOCA 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

谷口吉生

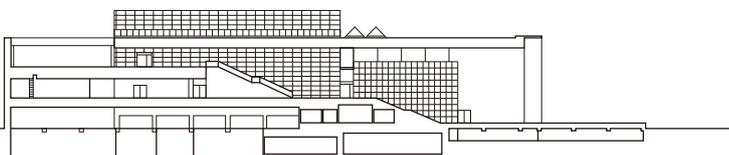
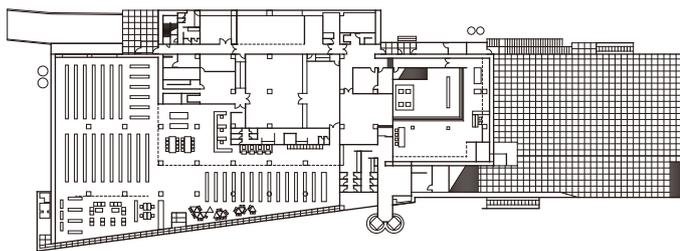
1991

Location : 香川

Site area : 5,974.53 m<sup>2</sup>

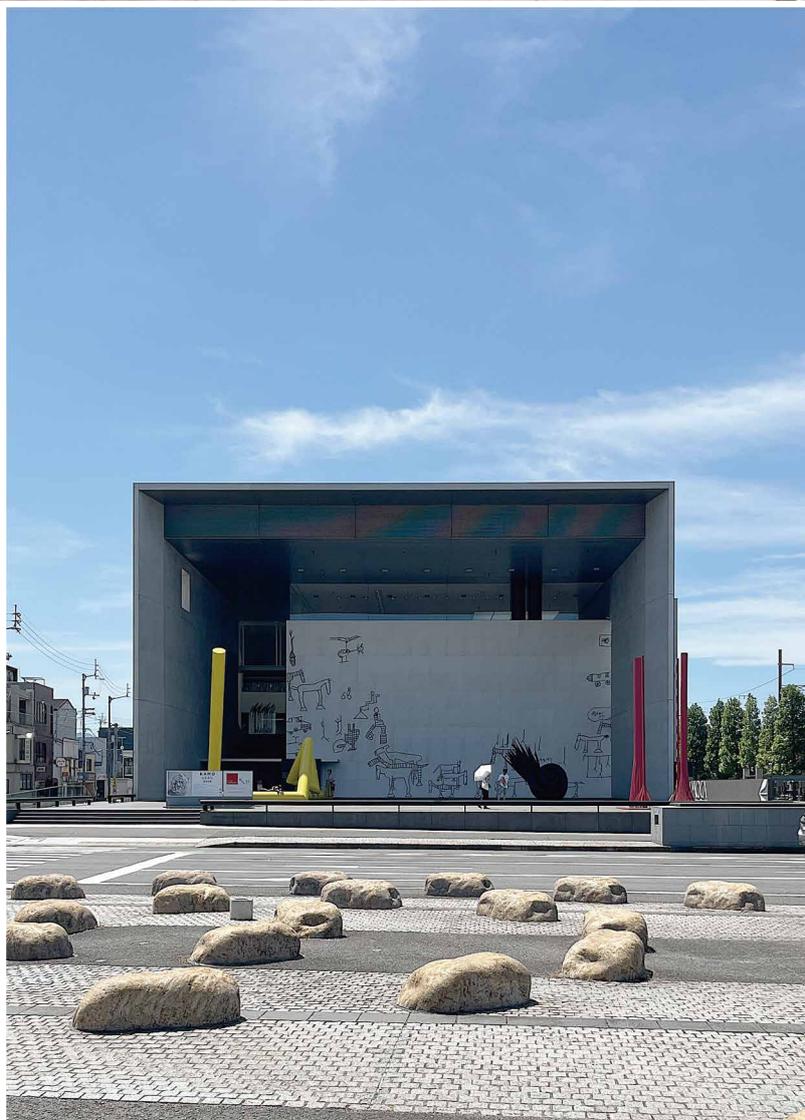
Total area : 11,413.95 m<sup>2</sup>

Building area : 3,564.80 m<sup>2</sup>





Interior



Exterior





DAY3

# G-HOUSE

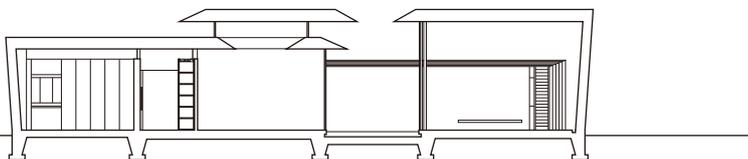
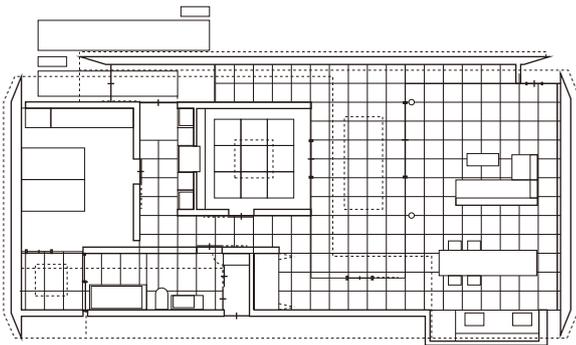
窪田勝文

2013

Location : 愛媛

Site area : 479.67 m<sup>2</sup>

Total area : 133.77 m<sup>2</sup>

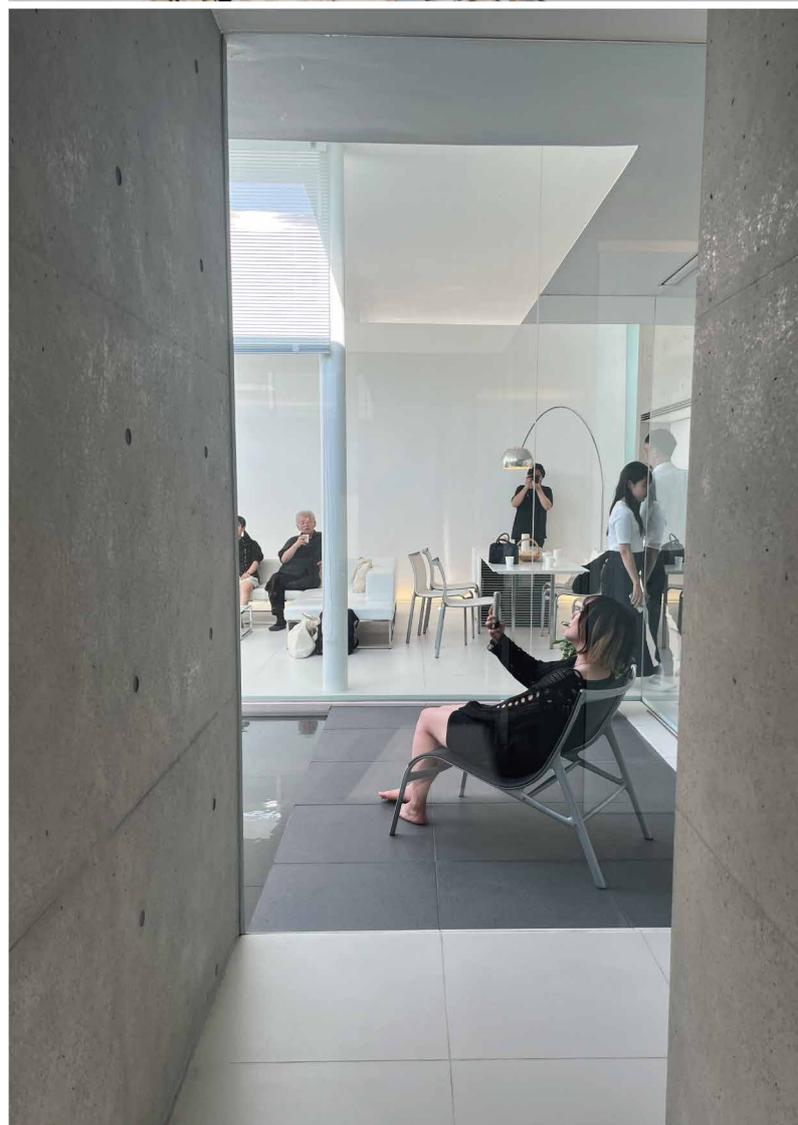


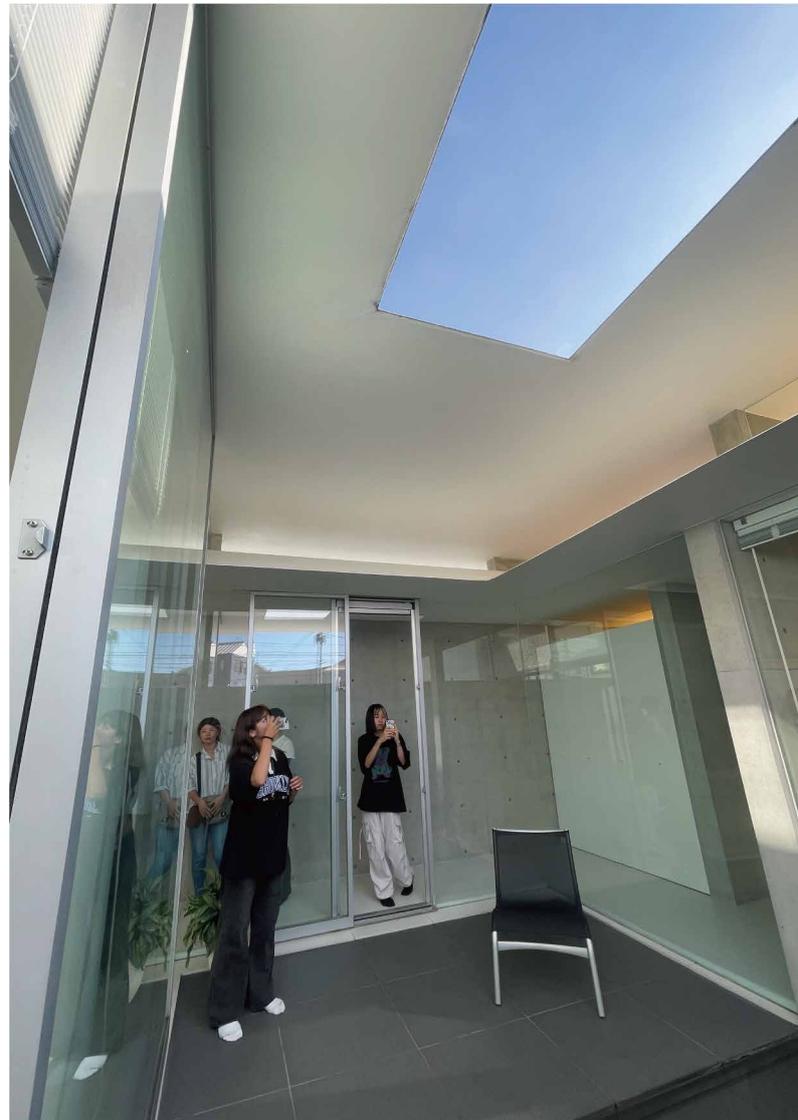


Exterior



Interior





岡山大学 交流広場 / SANAA

西谷 奈実



## Focus

### F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

パーゴラの色をはっきりとした白ではなく、温かみのあるピンクのような色にすることで周囲にある木々と調和し、違和感なく存在していると感じた。また湾曲していることで優しく人を誘導し、自然に囲まれていることで静けさと安心感があつた。

### F2. 建築を遠くから確認した first impression

薄い板が動物のように軽やかに動いていると感じて、遠くから見たときが一番印象的に残っている。また、建築に光が差し込んで見えるように見えたため、勝手に体が建築に引き込まれる感じがあつた。そしてその感覚は強引さがなく、優しく誘導されているようで心地が良かった。

### F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づいていくに伴って、遠くで感じていた印象が薄れていった。横に広い建築のため、近づくると一部分しか見えなくなっていくため、建築の動きがなくなり止まって見えるようになったことで面白くなつたのではないかと思つた。

### F4. 至近距離で何を感じるか

細部の粗さが気になつた。例えば、天井が黒くなり汚れていることや、地面の白色が雨や風などによって黒ずんでいることだ。外にあるためきれいな状態で保つことが難しいとしても、もう少しきれいな状態であれば、至近距離でも何か感じる事ができたかもしれないと思つた。

### F5. 内部と外部の関係性

壁がなく内部と外部の関係性が一体化しているため、ベンチに座り休憩していると風が通り抜けていくため、心地よかつた。また道路が近くに通つていても騒音を感じる事がなく静けさがあることで、さらに心地よさを生み出していると思つた。

### F6. シークエンスの展開

建築の周辺は重量感のある建物に囲まれていて、影が多くあるように感じて暗い印象だつた。しかし建築を遠くから見たとき、建築にだけ光が優しく差し込んで見えたため暗かつた気持ちが晴れたように感じた。しかし別日に見たほかの建築と違いシークエンスの展開がわかりにくかつた。

### F7. デティールが心に与える印象

私はこの建築のディテールを見て、なぜもう少し丁寧に細部まで取り組まなかつたのかと感じた。例えば細部で一番気になつた部分が、鉄と鉄の溶接部分だ。私のイメージでは溶接は配管同士を繋ぎ、人の目につかないようにするものと思つていた。そのため今回の建築では見上げると溶接部分がよく見えたため、現実感が強くなり良い印象を感じなかつた。

### F8. 建築に使っている素材について

鉄を使っていると知つたときはとても驚いた。鉄だけで軽さを表現することができるかと初めて知つたからだ。本来、感じる重さが全くなく、建築で無重力のような軽さまで表現することができるかと知ることができ、とても印象深かつた。

### F9. 建築見学をしての感想

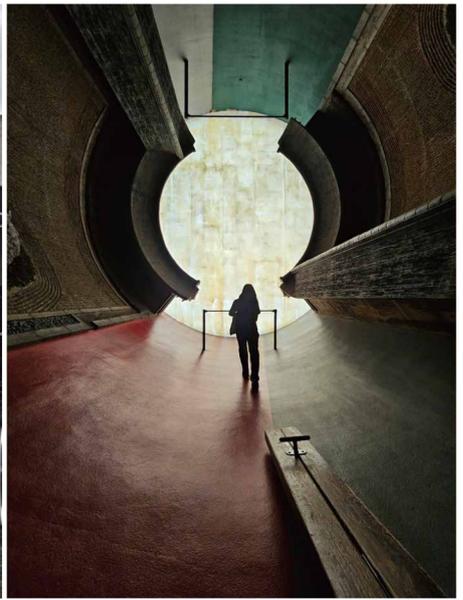
遠くから見たときは面白く感じたが、全体的にはあまり面白さを感じなかつた。しかし、建築は重量感を極限までなくせるということを経験することができた。これまで何カ所か建築を見に訪れたが、今までで一番軽さを感じる事ができたため良かった。

### F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

遠くから建築を初めて見たときに心が動いた。建築は重量感のあるもの、止まっているものという固定概念が崩れていくような感覚だつた。重力を感じさせることなく浮いて、動いているように見えた。また建築にだけ光が差してあつたことから、太陽の光も重要な要素であると再認識できた。

奈義町現代美術館 / 磯崎 新

相原 青空



## Focus

### F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

周りは山に囲まれているため自然豊かだが、美術館の周りは芝生になっており見晴らしが良い。また、町中にある美術館とは異なり周りに背の高い建物が無いため、集中して建築物を観察することができる。車の音や公共交通機関の騒音も少ないため、木々のざわめきや鳥・虫の声を敏感に感じ取ることができる。

### F2. 建築を遠くから確認した first impression

個別に存在しているかのように見える四角い立方体と円柱の建築は、青色の空と緑色の植物によってその存在を強調しているように見える。また、山の上にある閑静な民家の近くあるとは考えられないほど、異質さを放っているように見えた。

### F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づいていくと入り口への通路はガラス張りになっており、外部からでも内部の様子を確認することができる。また、太陽をテーマとして作られた空間の下側は小さい山が作られ、高低差が生まれている。アンジュレーションの役割を担っていると考えられる山は、見る人に奥行きを感じさせ、建築物により視線が集まるように工夫されているのだと考えられる。

### F4. 至近距離で何を感じるか

内部空間は音が響く素材が使用された床から、木材が使用された床へと移動することによって足音の変化を楽しむことができる。聴覚的な変化でも空間の移動を認識することができるということに対し、非常に興味深いと感じた。

### F5. 内部と外部の関係性

美術館内は全体的に照明が少なく薄暗いため、窓から差し込む光がより明るく鮮明に目に映った。また、照明に暖色を使用することで、外からの青白い光がより美しく感じられた。暖色と寒色の対比が空間を移動する人の心境に変化を与え、次の空間への興味に繋がるのだと考えた。

### F6. シークエンスの展開

天井高が低いところから高いところへ移動させることで、見る人が空間をより一層大きく感じるができる。また、外から見た際に、順序を予想できないようにすることで、内部空間をより楽しく、新鮮に魅せることができるのだと感じた。

### F7. デティールが心に与える印象

太陽をテーマとした空間は「危険」を感じさせる黒色と橙色で構成されている。また、上へと続く急な階段を囲む様にして建てられた円柱の壁は、斜めになっており、見る人に不安定感を与え不安を感じさせる。見る人が強く「不安」や「不快感」を覚えるのは、斜めの壁や急な階段に対する物理的な要素もちろんだが、危険信号を表す色彩とも深い関係があるのではないかと考えられる。

### F8. 建築に使っている素材について

建築素材としてコンクリートが多く使用されていた。外側からはコンクリートでできていることが全く想像できないのが面白い。コンクリートだからこそ魅せることのできる、照明の反射や厚みによる印象の変化が非常に興味深いと感じた。また、空間の床や壁の素材が変わるに従って、足音や声の響き方が変化することで空間の移動を感じられる。

### F9. 建築見学をしての感想

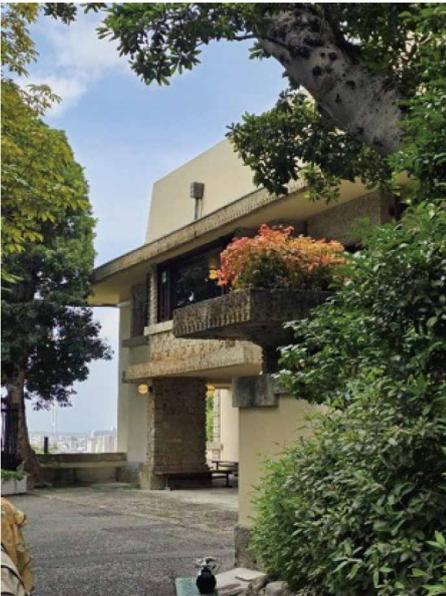
今まで訪れたことのある現代美術館や下瀬美術館などは外から見てもその順序が予想できるものが多くあったが、今回見学した奈義町現代美術館は外部から見てもその順序が全く想像できず、建物同士の繋がりがあまり感じられない点が興味深いと感じた。事前に大地・太陽・月をテーマにした建築だと言うことは知っていても、建築家の意図は理解が難しく、フィーリングでしか予想をすることができなかったが空間それぞれが違った雰囲気を持っていて、見ていて非常に楽しい作品だった。

### F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

私の心が動いた瞬間は、水に反射した光がコンクリートを淡く照らし、ゆらゆらと揺れる様子を見たときである。これが建築家の意図かは私にはわからなかったが、本来硬い印象を受けるコンクリートが不思議と柔らかく感じられるのが面白いと考えたからだ。また、太陽をテーマに作られた空間にある階段を上った先が壁になっており、後ろを向いた瞬間に重力を無視したような空間が視界いっぱい広がった瞬間は衝撃だった。物は重力に従っているという私たちの「普通」を覆すようなデザインは私の好奇心を掻き立てた。

ヨドコウ迎賓館・旧山邑家住宅 / Frank Lloyd Wright

相原 青空



## Focus

### F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

山に建てられているため、周辺環境は一帯が自然に囲まれており、人気は少なかった。木々が生い茂る中にあるその様子を見てみると、まるで最初からそこにあったかのように自然に溶け込んで一体化している。青々とした、揺れる木々中に静かに佇むアンティークな建築はおとぎ話の世界から切り取ったように優雅に感じられた。

### F2. 建築を遠くから確認した first impression

建物の周辺は木々に囲まれているため、外側からでは建築の一部分しか認識できなかった。しかし、歴史を体現するかのように木々の中に建っている姿は、過去から少しずつ変わっていく町を、影から温かく眺めているように見えた。

### F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

うねる坂道を進んでいくと、次第に入り口が顔を覗かせる。風になびく植物や奥に広がる町並みが、動かない建築物の重みと、日本ではあまり見ることでできない外装の、異質な雰囲気をもより一層強調しているように感じた。

### F4. 至近距離で何を感じるか

内部空間は、自分が今どこにいるかが分からなくなってしまうほど複雑な作りをしており、迷路のようだった。いくつかの部屋は生活感があるものもあり、そこに滞在していると、当時の様子が浮かび上がってくるよう気がした。

### F5. 内部と外部の関係性

内部空間は天井に照明がつけられておらず、吊下げ型の照明と壁照明で空間内の光を調整していた。中には、窓が小さく照明が1つしか無い部屋もあるため、全体的に明暗がはっきりしている。人が長く滞在することが考えられる食堂や応接室は、外部からの採光が多く明るいため、非常に開放感を感じられる。また、部屋の上部にある小さい穴は天井を淡く照らし、空間全体を洗練されたものへと昇華している。

### F6. シークエンスの展開

天井の低い階段や通路から、天井の高い空間へ移動させることによってより一層開放感を感じられる。また、和室も建築の一部に組み込むことによって、嗅覚や足裏の触覚などで様々な変化を敏感に感じ取ることができるのも面白い点だと考えた。

### F7. デティールが心に与える印象

和室にある引き戸の引き手や4階の食堂の窓など、多くの場所で三角形のデザインが使用されているため統一感があった。四角と三角のデザインがあるのならば、丸形のデザインも合っているのではと疑問に思ったが、このような細かいところからでも、建築家のこだわりが垣間見えて興味深いと感じた。

### F8. 建築に使っている素材について

内部と外部いずれにも様々なところで大谷石が使用されていた。ボロボロと崩れるのではないかと不安すら覚える石は、階段や空間の細部にも使われ、色味の少ない部屋の良いアクセントになっていた。加工がやすく、取り扱いやすいということを知ってから改めて見ると、ほとんどの柱に装飾が掘られていること気が付き納得した。

### F9. 建築見学をしての感想

今まで、軽さや開放感を重視した建築を見学する機会が多かった。しかし、今回見学したヨドコウ迎賓館は、内部空間・外部空間共に視覚に入ってくる情報量が多かったため、正直、複雑で圧迫感があるという印象が強い。また、他にも今まで見てきた建築と大きく違うところは、空間に入った際に、不思議と当時の様子が浮かび上がってくる点である。大正時代に住居として大切に使われていたその様子が、約100年後の令和の時代に生きる私たちにも思い起こされるのは、建築の面白いところであり、非常に興味深い点であると感じた。

### F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

私の心が動いた瞬間は、狭い扉をくぐり抜けた先に広がる応接室を見た時である。天井が高く、非常に開放感があるのはもちろんだが、向かい合うようにしてはめ込まれた2つの窓ガラスから、植物が生い茂っている様子を見ることができ、よく計算されていると衝撃を受けたからである。山の中にあり木々が生い茂っているという、一見不利な条件を、このように活用することができるのかと感心した。その場所にしかできない魅せ方をするという意識が私にはまだ無いため、非常に勉強になった。

司馬遼太郎記念館 / 安藤 忠雄

越智 こすず



## Focus

### F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

建物の敷地内には、東大阪の自邸が存在し、隣接されて設計されている。まずはその自邸を通り、司馬遼太郎記念館へとはいつていくのだが、自邸と隣接されていることで、司馬遼太郎のストーリーを感じることができるようになっていた。

### F2. 建築を遠くから確認した first impression

建物が見える気配がなく、生い茂る木々があり、公園の中に入るのだろうかと思った。また、立地も人々がアクセスしやすい場所ではなかったため、なぜこんなところに？という疑問を抱きながら敷地内内部へと歩き始めた。

### F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

植物園のような敷地の木々の雰囲気、心を落ち着かせてゆく。ここには水は流れていなかったが、どこからか水が流れ出ていそうな、音が聞こえてきそうな気がした。森の中に来たのだと勘違いするくらい自然を感じていた。

### F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離に行くくと建物の高さが高く、存在感に圧倒された。司馬遼太郎記念館の内部に行くにはコンクリートでできた曲線の壁を歩いていかなければならない。ずっと先が見えない状態で歩いていくと見えてくる入り口。ワクワクし始める。

### F5. 内部と外部の関係性

外部には木々が生い茂り、内部にはいるとステンドガラスから緑が風により揺れているのがわかる。私にはそのステンドガラスが水のような動きをしているように見え、内部と外部の境界線をあまり感じられることはなく、自然の中で本が保管されているように見えていた。

### F6. シークエンスの展開

生い茂る木々の中を歩き、自邸の前を通りながら司馬遼太郎記念館へと向かっていく。建物が見え始めたと思えば、コンクリートでできている曲線的な壁をすすみ、前の様子がわからないまま歩く。入口へ到着し、自動ドアが開くと右手側には地下から吹き抜け空間になっている本の展示空間が見えてくる。視覚操作をし、中へ入るまでのストーリーを感じた。

### F7. デティールが心に与える印象

内部にあるステンドガラスが様々な大きさや形の異なるガラス一枚一枚の柄のデザインが異なっていた。私はそのステンドガラスが、水の動きをしているように感じた。普通のすりガラスではなくこのようなガラスにすることで自然とのつながりを感じた。

### F8. 建築に使っている素材について

コンクリートと木が使用されていた。コンクリートの冷たい印象を木材の温かさで包み込まれ、何時間でも滞在できる気がした。ここでぼーっと座って過ごすだけで嫌なことや悩み事がどうでもよくなるような不思議な力を感じた。

### F9. 建築見学をしての感想

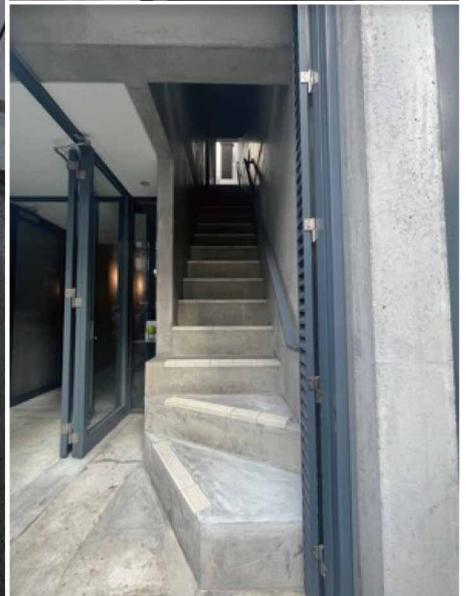
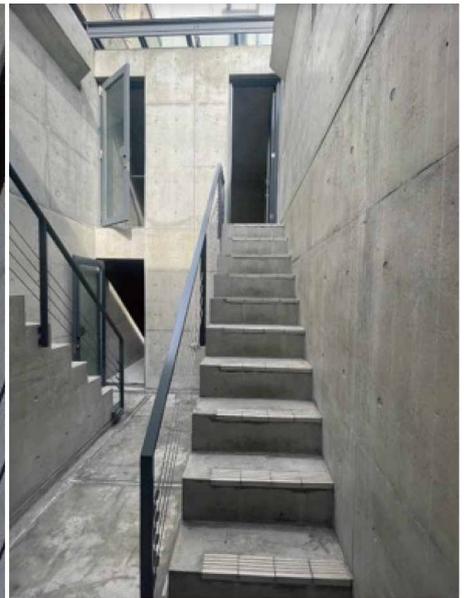
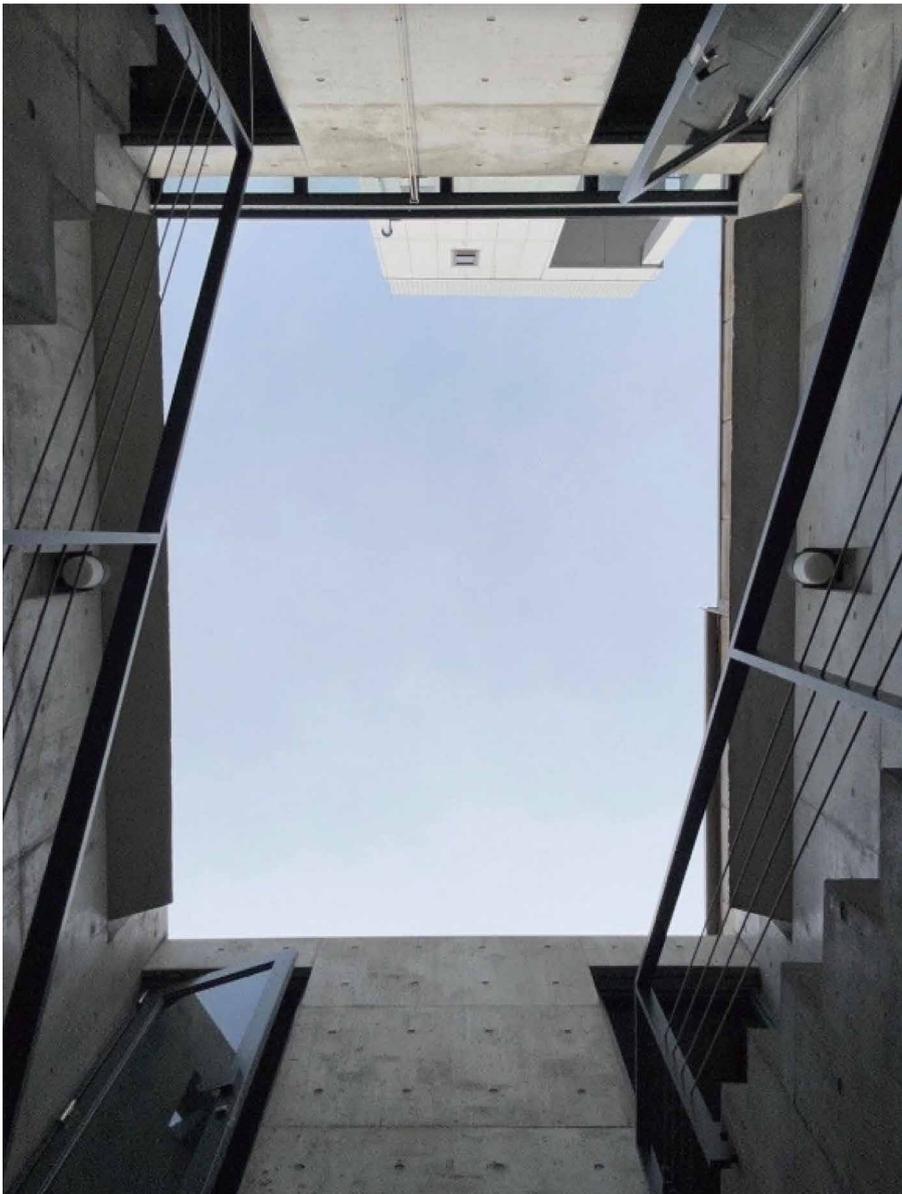
私はメディアセンターの設計実習の時にこの建築を知った。本は収納できれば良いだけではなく、魅せることも大事であるところの建築で学んでいたのが私がこの国内フィールドワークで一番楽しみにしていた建築がここだった。期待を裏切らない素晴らしいシークエンスの展開、空間構成だった。

### F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

地下に降り、吹き抜け空間になっている空間に立った時である。自分はちっぽけな人間だと思わせられたと同時に、本棚が動き、私たちが包み込まれそうな気持ちになった。曲線的な本棚は奥にスライドして動いていきそうで本棚と本が生きているのではないかと思った。

日本橋の家 / 安藤 忠雄

大江 美和



## Focus

### F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

日本橋の家は大阪府大阪市の中央区に位置しており、周辺環境は大通から逸れた飲み屋や商業施設が並ぶ小路のなかにひっそりと存在している。コンクリートの重厚な質感と存在感はそのままに都市の 1 部として周辺環境に溶け込んでいるような印象を受ける。

### F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから見るとコンクリートの独特な質感のある外観と周辺環境にすっぽりと取まっているような調和が印象的であった。図面や写真で見た壮大な空間がこの小さい建物のなかにあるのか到底信じ難いと思った。窓の配置が独特であり、内部からの採光はどのような感覚を起こすのか興味が湧いた。

### F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

入口から 1 階のギャラリー空間の奥へ進むにつれて狭い天井が一気に大きな吹き抜け空間へ広がる。外界の喧騒から離れると同時に自身を解放へ導くような安心感を感じた。内部空間の広がりや柔らかい光の入り方から、最初は単なる建物として捉えていたものが徐々に「体験」として認識され始めた。

### F4. 至近距離で何を感じるか

至近距離で建物の内部を観察していくと、照明がぼんやりと壁に反射され暖かな空気を纏っている展示空間と、コンクリートが持つ緊張感と冷たさが同時に存在していることに気が付く。居住スペースではコンクリートの壁により情報を遮断されながら階段を登った先には果てしない空が広がっており、自然に限りなく近づいていくような感覚を覚えた。

### F5. 内部と外部の関係性

内部と外部は共存関係にあり、内部であり外部、外部であり内部であった。ここで自分が持っていた固定概念のひとつである家のイメージが大きく崩れ、外部と共生しながら暮らすことの豊かさを体験しながらイメージすることが出来た。この建築において外部が持つ要素は当たり前を破壊する手段の 1 部として作用しているのだと感じた。

### F6. シークエンスの展開

展示スペースからわざわざ一旦外に出て居住スペースへと向かう階段へと進む際に、コンクリートの壁に四方が塞がれた階段の奥から柔らかな光だけが見え、心を揺さぶられた。建築によって導かれるという感覚を強く感じた。階段を上り始めると一気に閉鎖感に包まれ、2 階 3 階と進むにつれだんだんと視界に光が溢れ始める。そして吹き抜け部分に出た瞬間、感じたのは空だけだった。空に限りなく近づくことで自身の存在を再確認すると共に一種の瞑想に近い穏やかな気持ちになった。

### F7. デティールが心に与える印象

無駄なものを最大限に省き、必要な要素を限りなく拡張するために重要な要素は光とコンクリートの壁、シンプルさにあると思う。自然光を大胆に取り込んだ内部空間を際立たせるコンクリートの壁、またそれを実現させるシンプルなディテールが余計なものを排除し心に穏やかな印象を与えた。

### F8. 建築に使っている素材について

コンクリートという素材は無機質な質感が光を受けて更に表情を変えて変化し、シンプルながらも洗練された印象を与えた。また、ざらざらとした質感やひんやりとした温度が視覚や触覚を刺激した。またコンクリートに差す光と影のコントラストはまるで世界を分断しているような強烈な要素のように感じ、目を奪われた。

### F9. 建築見学をしての感想

移住スペースの吹き抜け空間にある階段に座り暮らしのイメージを想像したとき、内部と外部が共存しているからこそかかる苦労や生活の術は、人間が人間としての暮らしのなかで必要となる心の豊かさを取り戻すことができる要素なのではないかと本気で感じた。建築が持つ可能性は人の感性によって無限大であると思った。

### F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

私が 1 番心を動かされたのは 1 階部分の階段から吹き抜け空間に出た瞬間である。はじめにコンクリートの壁に情報を遮断されることで心に閉塞感が生じ、じわじわと追い詰められながら一気に空へと意識が向かう一連の空間の流れは衝撃的であった。この建築は建築の可能性のために存在しているのだと思った。

本福寺水御堂 / 安藤 忠雄

沖本 菜月



## Focus

### F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

バスで丘を登り、そこから徒歩で歩いて進んでいった。周辺は寺の住職さんの家のような建物があるくらいの自然に囲まれた田舎の風景が広がっていた。丘の上なので景色も綺麗で、静かな落ち着いた場所だった。木に囲まれた場所に溶け込むように計画されていた。

### F2. 建築を遠くから確認した first impression

木が多くある道を進んでいくと白い砂が敷き詰められた場所に伸びている道が見える。そして一枚の大きな長い壁が正面に見える。太陽の光に照らされて白い壁が白く発光しているように感じて、緑と空の青と白い壁の対比が綺麗だった。

### F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

道を進んで白い壁の近くまで来ると、壁の切り込みから向こう側にまた白い壁があるのが見える。その白い壁は曲線の壁になっており、何処まで続いているのか分からなかった。そして、直線の壁と曲面の壁の間から上を見上げると空の青さだけが見えて、現実の世界から離れた所にいるように錯覚した。

### F4. 至近距離で何を感じるか

曲面の壁をつたって、壁の端でその向こうを見ると、山と空をバックに蓮池が広がっていた。自然に囲まれた場所で、現実ではないような空気感だった。蓮の池の真ん中には階段があって、そこを降りている友達を遠くから見ると、池の中に入っていきような幻想的な風景になっていた。

### F5. 内部と外部の関係性

周辺の自然を全身で感じられるような建築だった。木などで周辺の住宅が見えないように隠してあり、世界観が守られるための配慮を感じた。分かりやすく現実世界からの隔離をしていて、それがしっくり感じられて神秘的な印象を受けた。

### F6. シークエンスの展開

白い砂が敷かれている所から世界が変わったように感じた。白い壁に挟まれて先がどこまで続いているのか分からず、空の青さが目につく環境になった時には完全に現実から切り離されていた。階段を降りるときは、池の中に入るというより、コンクリートに埋もれていくという感覚だったが、普通でない空間に入っていきという気持ちにはなった。

### F7. ティティールが心に与える印象

緑の中にある白い壁は存在感が強烈にあるように感じる。白い砂と白い壁が木の間から見えた瞬間に引き込まれる感覚があった。蓮池は水が緑色で周辺の山と一体化しているように感じたが、人が蓮池の中に入っていき光景は印象に残っている。

### F8. 建築に使っている素材について

本堂には朱色がふんだんに使われていた。外観やアプローチでは白やコンクリートが使われていたのに対し、内部に入ると朱色に目を引かれた。寺は昔から朱色が使われているイメージだったので、朱色を見ると寺に来た感覚があったし、内部に入るまではよくある寺とは遠い建築だったので、より存在感があり引き込まれた。

### F9. 建築見学をしての感想

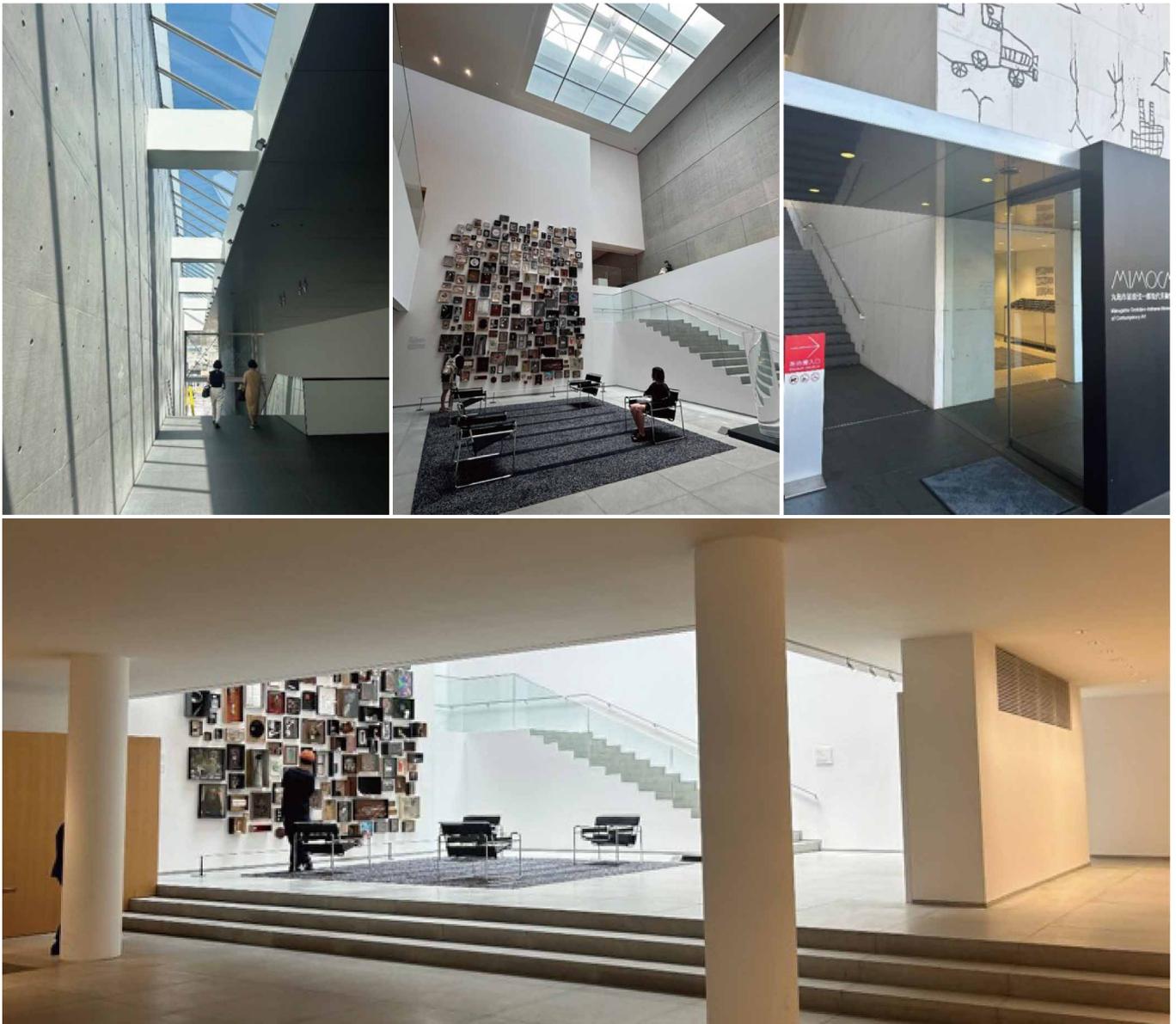
アプローチやシークエンスの展開が本当に分かりやすいなと感じた。誰でも世界観に引きずり込めるような、大胆でシンプルな建築に圧倒された。自然の壮大さも相まって、普段のお寺とは一味違う神秘的な空間に迷い込んだ感じがして、楽しかった。

### F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

白い壁が見えた瞬間に、ざわざわした。気づいたらもう違う世界にいるのではないかという驚きと一気に変わる空気感、そこから壁沿いに歩かされ絶対にこの先に広がる景色に驚かされると分かっている、実際に見て確実に心を動かされるこの建築が面白いなと感じた。

MIMOCA 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 / 谷口 吉生

西谷 奈実



## Focus

### F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

駅周辺のシンボルとなり、人を集める役割を担っているように感じた。近くにある商店街は利用者数が少ないと感じたが、美術館の近くまで行くと多くの人が訪れているように感じたため、この建築があることで人の流れを生んでいると思った。

### F2. 建築を遠くから確認した first impression

遠くから建築を見たとき、かっちりとした建築だと思った。また真面目な雰囲気のある建築だと感じた。海外の遊び心のある建築とは違い、日本人の性格が建築にそのまま表現されているような建築だと思った。遠くからでは面白さは感じなかった。

### F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づいて行くと、想像していたよりも大きな建築であったことにとっても驚いた。また奥に長さがあり、どっしりとした雰囲気を持っていながら、とても軽さを感じる不思議な建築だと思った。そして近づいて行っても真面目な建築だという印象は変わらなかった。

### F4. 至近距離で何を感じるか

壁画のある部分まで近づいても、「本当に想像していたよりも大きい」という印象が最も強かった。大きな壁に囲まれていたが、威圧感や重厚感を感じる事がなく、絶対に違うとわかっているにもかかわらず軽そうな構造でできていると感じるほどであった。

### F5. 内部と外部の関係性

内部にあるコンクリートの壁を内部だけで止めるのではなく、外部にそのまま延長していた。これにより、内部と外部の関連性が強くなっていると思った。この表現は美術館の外部の壁画を、図書館の内部の壁として取り込んでいることと同じだと思った。

### F6. シークエンスの展開

美術館に入る前、大きな壁に囲まれているのに対して入り口はかなり小さくなっている。エントランスまで低さが続き、照明も抑えられていた。しかし展示空間に行くと、吹き抜けになることで上下の開放と、外部から入ってきた柔らかな自然の光によりわっと心動かされる。

### F7. デティールが心に与える印象

どこを見てもグリッド状にきっちり収まっているように感じ、品があるように感じた。国内研修で見た安藤忠雄の建築は、強引に建築について教えてくるような感じがしていたが、今回の建築は対照的に感じた。建築を通しての伝え方は複数あると改めて気づいた。

### F8. 建築に使っている素材について

壁の素材として、石やアルミ、コンクリートなどを使用している。どの素材の壁も無駄な凹凸を出すことなく、カチッと収まり良くはめている点が共通していると思った。このことにより、品の良さを感じることができるのだと思った。

### F9. 建築見学をしての感想

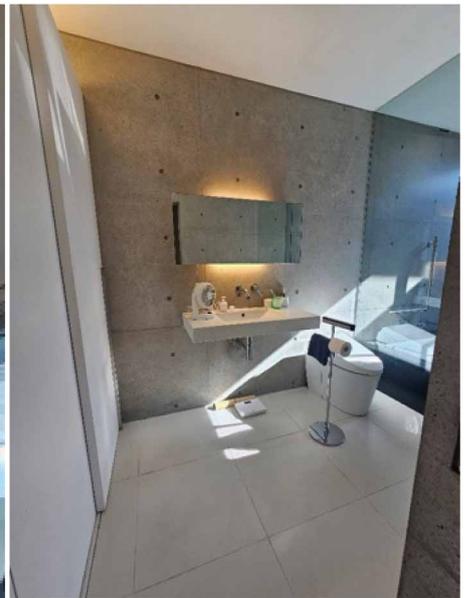
グリッド状にきっちり収めていることで、どこを見ても綺麗だと感じ、品のある良い建築だと思った。この方法でも心動かすことができるのだと知ることができた。しかし事前学習で調べて期待していた気持ちを上回ることがなく、あまり意外性がない建築だと思った。

### F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

美術館の入り口とエントランスから展示空間へと行くとき、展示空間から展示空間に行くときなど心動いた瞬間は何度かあった。天井を低くして、次の場面では天井高を一気に高くして明るさを増すことでわっと心が動いた。

G-HOUSE / 窪田 勝文

相原 青空



## Focus

### F1. 建築と周辺環境の関係性や相互作用

自然豊かな場所に位置しているため、非常にのどかな雰囲気を感じていた。また、車通りや人通りが少ないため、静かで落ち着いた町並みが広がっていた。植物と青空を背景に、静かに佇む白い建築はその存在感を強調され、より美しく見えた。

### F2. 建築を遠くから確認した first impression

周りに大きな建物も無いため、遠くからでも建築の大部分が確認できる。他の建物と比べて色が白い統一されているためよく目立つ。正面にある大きな壁は、内部にいる人のプライバシーを守り、奥の空間の広がりを感じさせる。

### F3. 近づく際の動的変化に伴う心の動き

近づいていくと、斜めに切り落とされた壁や屋根を確認することができる。一見白色に塗装されシンプルな印象を受けるが、壁に角度をつけることで空間全体に動きがあるように感じられて面白い。正面の大きな壁は普通の家では見られないが、白く塗装され1つの建築としてまとまっていると感じた。

### F4. 至近距離で何を感じるか

内部空間に入ると、水の音に心を奪われた。水の音は暑い外から帰ってきた人の心を癒やし、涼しさを感じさせる。玄関を開けた先に水が張っているという普通の家では考えられないような作りだからこそ見る人の心が引き込まれるのだと感じた。

### F5. 内部と外部の関係性

浴槽のある空間やリビングと和室に挟まれた空間には吹き抜けがあり、内部と外部の繋がりが感じられるようになっている。正面を大きな壁で覆われたこの建築にとって外部との繋がりが感じられる吹き抜けは非常に価値あるものだと感じた。逆に、外からの景色を安易に見ることができないからこそ、小さな穴から見る景色がより鮮明に、美しく私たちの目に映るのかもしれない。

### F6. シークエンスの展開

玄関から内部空間に入ると目の前にコンクリートの壁が見えてくる。進んでいくと、そのままコンクリートの壁が再び現れるのかと思われるが、そこに現れたのは予想もしていなかった、美しいガラス張りの壁だった。真ん中の天窗から漏れる光が薄暗い廊下を照らし、自然とそちらに視線が吸い込まれていく。外部から内部の情報が見えないからこそ、内部を新鮮な気持ちで見楽しむことができるのだと感じた。

### F7. デティールが心に与える印象

内部に存在している全ての照明が、壁に反射させて間接的に室内に光を取り入れるような形をとっていた。光源が目に見えないことで、より洗練された美を感じ取ることができ、豊かな印象を受けることができるのだと考えた。また、照明は全て暖色のものが使用され、外部から差し込む青白い光をより鮮明に感じ取ることができる。

### F8. 建築に使っている素材について

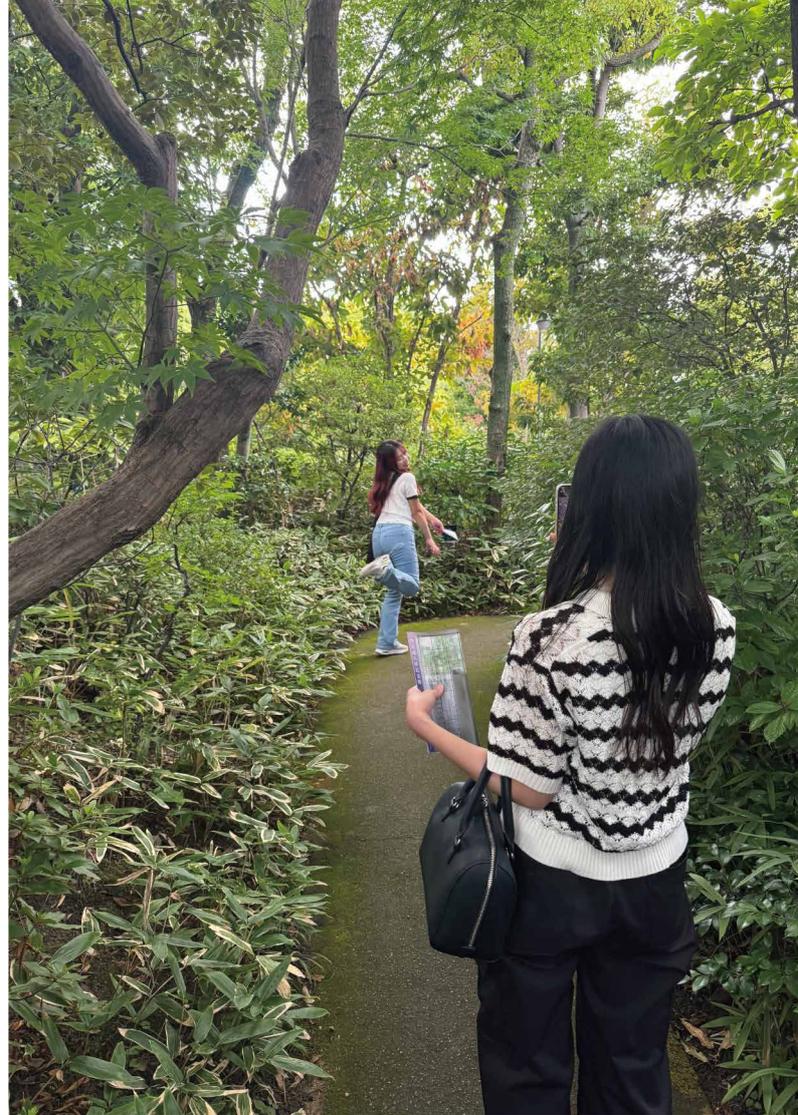
建築の壁にはコンクリートが使われ、外からの光を優しく空間に取り入れていた。灰色で冷たさを感じるコンクリートだからこそ、暖色の光がより温かく、安心感が得られるものと感じられるのだと思った。また、床に使用されている大理石や黒色のタイルは、空間によって使い分けられ、見る人の心を動かす鍵となっている。

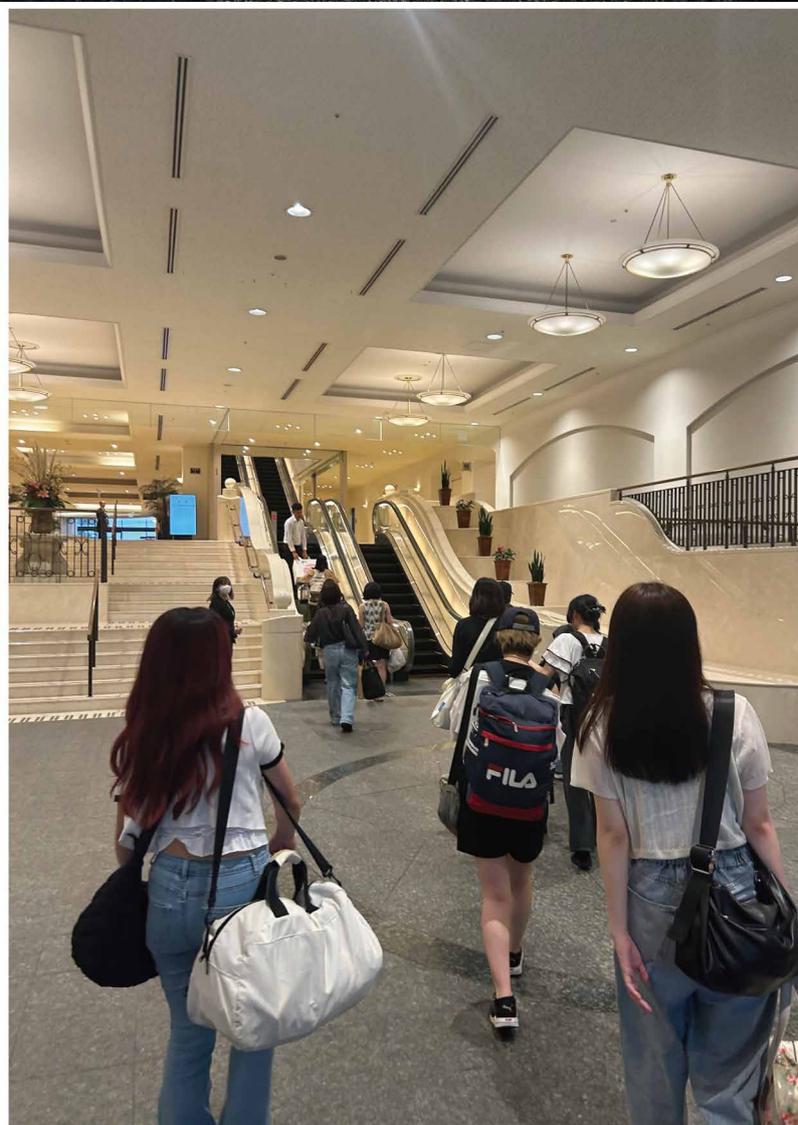
### F9. 建築見学をしての感想

私は見学をしながら『あなたは何の為に建築をするのか』という質問の答えを考えていた。そして私は、身の周りにある当たり前の事・物を価値あるものとして昇華し、その小さな豊かさに気付くための足掛かりとなることこそが建築の大きな意義だと感じた。まだ明確な答えは出ていないが、私は豊かな人生の架け橋となるために建築をしたい。普段生活をする中で、空や植物などの自然の美しさ、大切な人と同じ時間を共有することができるという、身の回りの小さな幸せに気が付くことが本当の豊かさに繋がっていくと考えるからだ。また、勝手だが、私の作った作品が、その人の人生における豊かさの一部となれたら嬉しいと感じた。

### F10. 心が動いた瞬間をどこで感じたか

私の心が動いた瞬間は、リビングと和室の間に位置している吹き抜けを見た時である。薄暗い廊下から見える青白い光はより美しく鮮明に見えた。また、外部との繋がりがあまり感じられない空間から見える空は、時間や季節によって異なる表情を魅せてくれるだろう。朝には、明るく爽やかな光が差し込み、昼頃は温かみのある落ち着いた光が降り注ぎ、夏や冬の夜には満天の星が空間に広がる。家族であの場に集まり、空を眺めながら談笑するのも非常に楽しそうだと考えた。建築と共に季節の訪れや、時間の経過を楽しむのも面白いかもしれない。









# 2024年 国内建築見学実習

ライフキャリア特別セミナーⅢ  
建築国内フィールドワーク

編集：広島女学院大学 人間生活学部 生活デザイン学科 建築士課程  
表紙デザイン：Storm Graphics 嵐川 真次  
発行：2024年12月

本誌掲載の記事、写真、ロゴ等の無断転載・複製を禁じます。

HIROSHIMA JOGAKUIN  
UNIVERSITY

Human Life Studies  
Department of Living Design  
architect course

Domestic architectural  
practice